

外国人学生と日本人学生による短期協働プログラム における学びと友人関係の構築に関する事例報告

— SSIP2018 に参加した日本人学生に関する調査 —

西川 寿美・恩村由香子・山崎 真伸

1. はじめに

本稿では、昭和女子大学（以下「本学」）で実施された SWU Summer International Program（略称 SSIP：以下「本プログラム」）に参加した学生を対象に行った調査に関して報告する。

本プログラムでは、「外国人学生」と「日本人学生」¹ がともに学び、協働して一つのプロジェクトを遂行する。文化的背景の異なる他者との協同作業のプロセスの中で、参加者にはどのような学びがあったのか、2018 年度の本プログラム（以下「SSIP2018」）に参加した学生を対象に、外国人学生と日本人学生の二つのグループに分けて半構造化インタビュー調査を行った。外国人学生に関する調査については、「外国人学生と日本人学生による短期協働プログラムにおける学びと友人関係の構築に関する事例報告— SSIP2018 に参加した外国人学生に関する調査—」²（以下「前稿」）において論じているが、本稿では第二報として、日本人学生に関する調査結果について報告する。

近年、海外留学を伴わない多文化間交流プログラムについては、国内でも多くの実践例が報告されており、その蓄積をもとに「多文化間共修」に関する研究が深まっている。坂本、堀江、米沢（2017）によれば、多文化間共修は、「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティにおいて、その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合う仕組み」と定義される³。前稿で分析を行った外国人学生にとって、本プログラムに参加することは「海外留学」であるが、一方、日本人学生にとっては、国内において外国人学生と相互に学び合うことのできる多文化間共修に参加することを意味する。

2. 本プログラムの概要

2-1 SSIP2018 の概要

本プログラムは、2013 年度から毎年行われている約 3 週間のプログラムであり、SSIP2018 は、2018 年 6 月 19 日から 7 月 9 日の日程で行われた。参加学生は、北米・アジアを中心とした 6 ヶ国 13 名の外国人学生と延べ 46 名の日本人学生であった。

本プログラムは、Japan Studies と Cross-cultural Workshop の二つの科目で構成されている。このうち、Cross-cultural Workshop は 3 週間継続して外国人学生と日本人学生が相互に学び合うことを意図した授業であり、多文化間共修プログラムの一つの事例と捉えられることから、本稿においては Cross-cultural Workshop における学びについて取り上げる。Cross-cultural Workshop の履修者は、外国人学生 13 名、日本人学生 33 名であった。

2-2 Cross-cultural Workshop の概要

Cross-cultural Workshop は、外国人学生と日本人学生が一つのテーマ（広告の分析）について協

働しながら課題に取り組み、その成果を発表する多文化間共修ワークショップである。参加学生は、自文化や異文化、コミュニケーション、自己・他者に対する気づきや学びを経験するとともに、言語や文化等の背景の違いを超えて相互理解を深めることの難しさと意義を体験することとなる。

実践の概要は以下の通りである。

① 目標

本ワークショップの目標は三つある。まず、今回のテーマである広告の分析を通じて、日本社会・文化や外国人学生の文化について学ぶことである。次に、参加学生がさまざまなアクティビティ、ディスカッションや協働作業において積極的に関わり合い、そのやりとりを通じて自文化や異文化について理解を深めることである。また、自らとは文化背景が違う人と協働することにより、異文化間コミュニケーション能力および異文化適応能力を育成することも目指している。

② 内容・スケジュール・課題

90分全15回のセッションは、表1にあるように二部構成となっており、全て英語で行われた。授業は恩村が担当し、必要に応じて本学教学支援センター国際交流課職員がサポートに入った。

第I部は、文化・異文化間コミュニケーション・協働についての理解を深めるとともに、参加学生が多くの人とコミュニケーションの機会をもつことを目的とした。講義の他に、できるだけ多くの人と接点があるようさまざまなアイスブレイキングアクティビティやチームビルディングアクティビティおよびグループ活動を行った。学生は2～3回のセッションごとにジャーナルを提出、コミュニケーションの過程において何が起きていたのか、自分がどう行動し、どう感じたかを振り返ることが求められた⁴。

第II部では、まず、講義やグループ活動を通じて、今回のテーマである「広告」について学んだ。プロジェクトの課題は、街頭広告の分析であった。学生は、5～6名（外国人学生が1～2名、日本人学生が3～4名）の8つのグループに分けられた。まず、学生は分析のテーマやアプローチをどうするかについて話し合い、データ収集のプランを立てた。そして、グループで実際に街へ出て、街頭広告の写真を撮影し、それを持ち帰り、分析して、その結果を発表した。発表準備の最終段階には東明学林⁵で二泊三日の宿泊研修を行い、寝食を共にしながらグループで課題に取り組んだ。

学生は4回のジャーナル提出と最終プレゼンテーションにより2単位を取得する。

表1 Cross-cultural Workshop スケジュール

第I部	第1回	オリエンテーション（コースについて・協働とは）
	第2回	アイスブレイキング&チームビルディング
	第3回	講義（文化・異文化間コミュニケーションとは） グループ活動（異文化間コミュニケーション能力とは）
	第4回	チームビルディング
第II部	第5回	講義（広告とは） グループ活動（広告分析）
	第6回	プロジェクトの導入・グループ分け データ分析プラン
	第7～8回	データ収集
	第9～10回	データ分析
	第11～14回	発表準備（於東明学林）
	第15回	発表

3. 調 査

3-1 調査目的

本調査の目的は以下の通りである。

- ① Cross-cultural Workshop を通じて日本人学生にどのような学びが得られたか、「態度」「知識」「スキル」の観点から明らかにする。
- ② 参加者同士でどのような友人関係が構築されたか、またそのことが日本人学生の学びにどのように影響を与えたかを分析する。

3-2 調査方法

本調査では、Cross-cultural Workshop に参加した日本人学生 33 名のうち 6 名に対して、半構造化インタビューを実施した⁶。調査対象者の抽出においてはできるだけ異なる集団から選ぶことを重視し、学部学科、学年、Cross-cultural Workshop のプレゼンテーショングループのいずれかが異なっていることを基準に選んだ。

調査対象者は、全員が本学の海外キャンパスである昭和ボストンに半年以上の留学経験がある。このため、程度の差はあれど全員が海外での異文化生活を経験しているが、昭和ボストンでの授業の大半は日本人学生だけで行われることが中心のため、同年代の外国人学生との協働学習の機会は必ずしも多いとはいえない。昭和ボストン以外の短期研修やテンプル大学ジャパンキャンパス（以下「TUJ」）での単位互換プログラムに参加した学生 2 名のうち 1 名の教室内の環境は同様であった⁷。

調査対象者の属性は表 2 の通りである。

表 2 本調査におけるインタビュー対象者 6 名の海外経験

学生	これまでの海外経験等
A	昭和ボストン（半年間）
B	昭和ボストン（1 年半）
C	昭和ボストン（半年間）
D	昭和ボストン（半年間）
E	中学、高校での短期研修、昭和ボストン（1 年間）、TUJ 単位互換プログラム
F	昭和ボストン（半年間）、TUJ 単位互換プログラム

インタビューは、本プログラム終了後の 7 月 30 日、31 日、8 月 1 日、8 月 2 日の 4 日間にわたり、個別に行われた。1 回のインタビューの所要時間は 45 分から 60 分で、使用言語は日本語である。各学生に対しては、本調査の趣旨・目的を説明し、調査に応じることは任意であり途中辞退も可能であることを伝え、またインタビューを記録することと個人情報の取り扱いについて同意を取った上で調査を開始した。インタビューは、山崎が担当し、記録協力者として本学国際交流課の職員 1 名が同席した。

全てのインタビュー後、録音内容と記録メモを照合しながら最終記録を整えた。本調査では逐語的な記録は不要と判断したが、分析過程において重要と思われる箇所については元の録音に立ち返り、その部分の逐語的な書き起こしを行った。次に、この最終記録を対象に事例コードマトリクスの手法に則り⁸、共通する項目をもとにコード化および分析を行った⁹。分析は調査目的に沿って、①本プログラムを通じてどのような学びが得られたか、②参加者同士でどのような友人関係が構築されたか、

またそのことがどのように学びに影響を与えたか、の二つの観点から行った。

4. 分析結果

4-1 本プログラムを通じて得られた学び

前稿では、海外留学における異文化適応能力（ICC：Intercultural Competency）の獲得モデルとして Deardorff（2006）が提案したピラミッド型モデルを主に参照した。このモデルでは、①態度（Attitudes）を基底とし、②知識（Knowledge）、③スキル（Skills）が同時並行的に習得され、最終的には内面的、外面的な異文化適応能力が獲得されるとしている。Deardorff のモデルは、米国内の大学で行われた海外留学プログラムを対象に行われた調査をもとに抽出された概念であり、多文化共修プログラムは対象とされていない。しかし、海外留学での学びと多文化共修環境での学びは異なる概念ではなく、これらは体験の過程が異なるだけで、結果的に学習者は何らかの国際交流活動の経験を通じて異文化適応能力を獲得する（もしくは高める）とする考え方は、広く認知されつつある¹⁰。

前稿においては、Deardorff（2006）の提案したモデルに加え、このモデルを使って海外短期プログラムにおける学びを分析した秋庭（2012）の手法を参考に、「態度」「知識」「スキル」の三つの観点について外国人学生がどのような学びを得たのかについて分析を行った。本稿においても、同様に日本人学生の学びについて、以下の三つの観点に分けて分析する。

- ① 「**態度**」：好奇心や他者への敬意といった前向きな気持ちをもつこと、新しい体験を通して自信、積極性、柔軟性などを習得することなどを指す。学びの内容としては、積極的な姿勢や世界観を拡げることができたかどうかという内省的な観点から把握する。
- ② 「**知識**」：異文化理解に関わる知識（異文化の概念、異なる文化間の違いと共通性）、本プログラムにおいては、特に広告分析の中で発見した文化的背景の違いを含める。
- ③ 「**スキル**」：文化的背景の異なる他者とコミュニケーションする力、異文化を解釈し理解しようとする力を指す。

4-1-1 「態度」に関する学びや気づき

調査対象となった6名全員が、プログラムを通じて何らかの成長があったと語っている。成長を実感したポイントはさまざまであるが、積極的に外国人学生に働きかけることによってそれまでのやや内向的な自分を変えることができた、外国人学生の中にもいろいろな個性があることを柔軟に認識するようになったなど、自分自身の変化について言及する学生が見られた。

- ・ 自分から話しかけなきゃ何も始まらないことが分かった。コミュニケーション能力を高めたこともプログラム参加理由なので、端っこで人の意見を聞くだけでなく極力自分から発信することを心掛けたことは、多少なりとも成長できたと感じる。（学生B）
- ・ 自分から伝えようとするのが大事。そうすれば相手が理解してくれようとするので、自分の英語力に対して申し訳なく感じる必要がないと思った。自信がなくて交流の機会を逃すのはもったいない。（学生D）
- ・ 元々は自分がどれだけ英語を喋れるようになったか試すつもりだったが、それを確認するだけでなく外国人学生の個性を感じ取ったり、それ以外に自分がいろんなことに気付けることが分かった。

前は自分が英語で話すことにいっぱいいっぱい周りを見る余裕がなかった。(学生 A)

また、何人かの学生は、グループワークを通じて、外国人学生の主張の強さや課題に取り組む姿勢に驚きつつも刺激を受けたようである。日本人学生にとっては、そのような状況の中でプレゼンテーションを準備することは困難であったが、それをやり遂げたことによって達成感や視野の広がりを感じたとするコメントもあった。

- ・ 外国人学生と一緒に授業を受けることがとても新鮮で、普段海外の学生がどう授業に臨むか見られた。外国人学生の積極性に刺激を受けた。日本人学生とは違う。(学生 C)
- ・ グループプレゼンはお互い意見を言い合ったり、パワーポイントを作った後もみんなでアドバイスを送りあったりしたため、個人作業はあまりなく、終わった後の達成感は大きかった。(学生 B)
- ・ 大変だったことは、プレゼンテーションの準備の時に外国人学生は自分の意見をすぐもっていて主張する場面が多かった。広告分析は今までしたことがなかったので、(私は) 分析の仕方・ものの見方が他の外国人学生よりも劣っていたと思う。意見がないわけではないが考えがまとまらずに、きちんとできないことも多かった。これは日本語でも難しいと思う。いろんな視点をもった人たちと一緒にプログラムをすることで、困難ではあったが、挑戦することによって視野が広がった。(学生 F)

本プログラムでは、授業やグループディスカッション等も全て英語で進行する。英語で自らの意見を主張し議論することはそれ自体が多く日本人学生にとってはチャレンジであり、この点について言及する学生もいた。思ったよりもうまくできたと感じる学生もいれば、自分の力不足を感じた学生もいた。しかし、いずれの学生も諦めずに伝えることに努力する姿勢を見せている。

- ・ 話しているのを聞くことはできるが、自分が感じたことを英語で伝えることが難しかった。一度では理解してもらえなかった。表現が難しかったので、言葉を変えたり、広告を指さしたり、周りに助けってもらって最終的には伝わった。(去年は Japan Studies に参加していたが) その時はなかなか言いたいことが伝わらず最後まで理解してもらうことを諦めかけていた。今回は先生の指導のとおり、いろいろな手段を用いて粘り強く最後まで伝えることに努めた。(学生 D)
- ・ 自分の成長は感じられたが、まだまだとも感じた。今回は聞き取ることはできたが、自分の言いたいことを伝えることに課題が残った。プレゼンテーションをつくる最初の段階で自分の言いたいことが外国人学生に伝わっていなかったことが、最後のリハーサルの段階で分かった。一緒に何かを作り上げていくプロジェクトでは正確に伝える力は絶対に必要だと思った。(学生 E)

4-1-2 「知識」に関する学びや気づき

本プログラムの主要な取り組みである Cross-cultural Workshop では、2-2 で述べたように自文化および異文化について理解を深めることを目的としている。学生のコメントからは、特に広告分析の作業を通して、異なる文化による視点の違いについて驚きや発見があったことが分かった。

- ・ プレゼンテーションを作る工程で自分では考えもしないアイディアが外国人学生から出たりした。例えばデパートのコスメ広告には人はあまり使わない。ドラッグストアのコスメ広告では人が使われ、キャッチフレーズを入れて分かりやすいアプローチをする。こうした視点を変えた見方ができる人が外国人学生、日本人学生に関わらずいて、すごいと思った。(学生 B)

- ・ 東明学林で最終プレゼンの準備をしていた時、外国人学生 N さんから「何で日本の化粧品なのに外国人を広告に使っているのか」と質問があって、「日本人は西洋人の女性を綺麗だと思っているから憧れもあるし、普段大人っぽく見えるように化粧をするから広告塔に使っている」と伝えたら「アメリカでは逆の化粧の仕方をする」と言われ、新たな発見があった。(学生 D)

さらに、自国文化に関して学ぶ機会となつて、興味関心が広がったとする学生も見られた。

- ・ 留学生は日本のことについて知りたがって、いろいろ聞いてくる。改めて日本を見つめ直す機会になった。(学生 D)

また、外国人学生とのディスカッションやワークショップでの協働作業を通じて、自国の文化と異文化の違いばかりでなく、共通する普遍性について理解が深まったとする学生もいた。

- ・ 授業でチームビルディングやリーダーシップの取り方の勉強をしているが、(この考え方は)日本人だけでなく世界共通のものと認識できた。(学生 C)
- ・ 実際接してみて、意外と日本人学生の方がちゃんと意見を言えていたり、(外国人学生にも)シャイな学生がいたりした。結局人によるというか、どの国も同じようなものかなと思った。(学生 A)
- ・ 一緒に時間を過ごす中で性格や価値観は国が違っていても同じことも多いと感じた。外国人学生でも静かな人があるな、と感じた。(学生 F)

4-1-3 「スキル」に関する学びや気づき

多くの学生が、英語を使って自分の意思をきちんと伝えるためのコミュニケーション・スキルについてコメントしている。正確な英語でなくても、ほかの手段も利用しながら相手に伝えることができたとする学生もいれば、反対に議論する場面においてはもっと正確な英語で話さないときちんと伝わらないという意見も見られた。

- ・ 大変なところは英語でのコミュニケーション。全てを伝えられる英語力はない中、プロジェクトを進めることに苦戦した。ことばの使い方や文法の間違いで勘違いさせてしまうことや、プレゼンテーションの資料が違う方向で作られて行ってしまうことがあった。R さん(日本語の分かる外国人学生)がいたので他のグループよりも軌道修正がスムーズだったと思う。1, 2 年のころに比べたらかなりできると感じたので言葉の壁を大きく感じたほどでもないが、自分の意見を正確に伝える上で語彙力や文法など土台の部分が大切とも感じた。(学生 A)
- ・ (ことばの壁は) まだある。言いたいことがはっきりとは伝わらない。辞書に頼る部分もあったので壁がないというところまではいかない。ただ、70~80%くらいは伝わると感じたので、あまり高くは感じなかった。言葉以外のコミュニケーション手段は画像を見せる、など。(学生 B)
- ・ 一緒に何かを作り上げていくプロジェクトでは正確に伝える力は絶対に必要だと思った。第二言語だからこそ曖昧さは回避すべきとグループワークを行っていて感じた。(学生 E)
- ・ 英語でコミュニケーションをとる時は基本的な言葉を使うようになる。日本語で話し合う時に比べて考えがシンプルになる。日本語で考えると難しく考えすぎてしまうことでも英語だと簡単に考えられる。(学生 F)

英語によるコミュニケーション以外では、多文化間グループの中でのディスカッションやチームビルディングに関するスキルについてもコメントがあった。外国人学生は主張が強く、その中で円滑にグループワークを進めることに苦心したという意見もあり、またグループの中で自分が果たすべき役割について試行錯誤があったとする学生もいた。

- ・ ディスカッションの時は全員活発に意見を言えていたが、外国人学生がより積極的だった。グループのテーマ「クリエイティビティ」は外国人学生から出たアイデアだった。ただ、特に決めたわけではないが、Mさん（日本人学生）が全体のファシリテートをしてくれたので日本人学生も意見を言いやすい雰囲気だった。（学生C）
- ・ （プレゼンテーションの準備で）外国人学生と日本人学生の作業スピードが違うことに驚いた。またリハーサルの時も、外国人学生は原稿を作らずにスライドだけを見ながら発表することがすごいと思った。日本人学生はカンペを用意しないとできない。コミュニケーションにおいても日本人と違って相手をズバっと否定するので、オーって思った。日本人はもっと柔らかく包んで話すので。（学生B）
- ・ （リハーサルの後の修正作業をする段階では）自分から意見を言えたと思う。最後の方はプレゼンテーションが形になってきたからみんなを引っ張る方向が分かっていたのもある。最初の頃はアイデアの段階だったので自分から動き出せなかった。グループを引っ張るところまではいかないが、みんなと同じ方向を向くように自分なりに貢献できた。（学生E）
- ・ あまりグループワークをしたことがなくて、今回感じたのは、自分は率先するタイプではない。でも他の人のアイデアをサポートできた。今回は他の日本人学生が率先してまとめてくれたので、それをサポートする形で参加した。うまくできたと思う。（学生F）

以上のように、Deardorff (2006) のモデルを使いながら、本プログラムにおける学びについて、「態度」「知識」「スキル」の三つの側面から分析した。次に、日本人学生はどのように友人関係を構築して深化させているのか、またそのような友人関係がプログラムでの学びにどの程度影響を与えているか、日本人学生の回答を分析する。

4-2 友人関係の構築と深化による学びへの影響

4-2-1 友人関係構築のきっかけと深化

前稿では、本プログラムに参加した外国人学生は、自ら働きかける学生が比較的少なく、逆に日本人学生に対して「シャイではあるが積極的な学生が多い」という印象をもっていたことが明らかになった。この点については、日本人学生のインタビューからも同じような意見が見られたが、自らが意識して関係構築に努めた学生が多かったことも分かった。

- ・ （外国人学生にも）シャイな学生がいたりした。自分から働きかけて話しかけた。自分でも頑張ったと思う。（学生A）
- ・ 外国人学生は特定の学生と深く、というよりいろんな人に話しかけるように努めていたのでみんなとある程度話せた。（学生F）
- ・ 元々人と関わることはあまり好きじゃなかった。日本人ともあまり得意でなかった。それを克服したくてプログラムに参加したが、Welcome Party で、最初は外国人学生と日本人学生が別々に固まっていて、これだとまたいつもと同じになっちゃうかな、と思った。担当の職員の方に後押しされて、こ

のままじゃだめだと思って留学生と話すことができた。自分としては頑張った。(学生 B)

このように半ば意識的に交流を図ろうとした学生が多かったが、それでもすぐに友人関係の構築が進んだわけではなく、3 週間のプログラムの中で徐々に関係が深まっていたようである。特に、東明学林での宿泊研修によって関係が一気に深まったとする学生が多く、この宿泊研修が友人関係の構築に大きく作用していることが明らかになった。

- ・ グループの最初の雰囲気は課題に関して話すことはあったが、それ以外の話はあまりなかった。東明学林ではずっと一緒に過ごしていたので、さらに仲良くなった。着いた日の夜、1 時間～1 時間半くらいずっとプライベートな話を部屋でしていて新たな一面を見た。(学生 D)
- ・ 最初はみんな緊張していたが段々打ち解けていった。一番大きかったのは東明学林で一緒に生活したこと。世田谷では「授業」だが、東明学林ではプライベートの時間も共有するのでそれがよかった。(学生 C)
- ・ (外国人学生と仲良くなったのは) 東明学林が大きなきっかけ。フリー時間を使って同じグループのメンバーとはプライベートなところも突っ込んで話げできた。東明学林ではずっとグループメンバーと一緒にだった。(学生 A)
- ・ 仲良くなったきっかけは東明学林。授業では限られた時間だったが、東明学林では一日中一緒にいたので留学生のことを深く知ることができてすごく仲良くなれた。初日は部屋で UNO をして盛り上がった。そのあとはプライベートな話をしたり、K-POP を流して踊ったりして楽しんだ。(学生 E)

またこのような友人関係の深化の結果、かなりの程度まで親しい友人となったとし、またそのこと自体が、「プログラム満足度に大きく影響している」(学生 E)、「人間関係の深まりの方が自分の参加目的を達成することよりも大きい」(学生 F) など、プログラムの評価につながる学生が見られた。

- ・ 友達にも段階があって、全てを曝け出せる人と、ある程度の表面的なところで付き合う人がある。自分は結構誰とでも仲良くできるタイプだが、自分の悩み事だったりあまり人には言いたくない話ができる友だちはあまりいない。Pさんは、悩み事の深いところまで話すまでには至っていないが、プライベートな時間も一緒に過ごしたいと思える友達。外国人でここまでプライベートなことを話せる友達は初めて。(学生 A)
- ・ 外国人学生の J さん、N さん、M さんとは仲良くなれた。(3 人との仲の良さは) 真ん中より上くらい。これからもずっと仲良くしていきたいと思う。そう思える友達はそんなに多くない。中学の時のホームステイの子と、ボストン留学の時にできた現地の学生と、ボランティア先の女性くらい。(学生 E)
- ・ Pさんは今までできた外国人の友達の中では上位。自分の目的・目標(いろいろな国の学生と交流すること)を 100%達成できたわけではないが、プログラムを通して学んだことが多かった。留学生と交流できたことが満足度を高めている。(学生 B)

4-2-2 友人関係がもたらした学びへの影響

このように日本人学生のほとんどが外国人学生との何らかの友人関係を構築できたと述べているが、それではこの関係がどのように学びに影響したと考えているのか、学生の意見を確認する。

- ・ グループの雰囲気は最初と最後でかなり違った。プレゼンテーションが形になっていたからなのか、

グループ自体の仲が良くなったからなのかは分からない。ただ、仲が深まっていたことがプレゼンテーションのリハーサル後の修正作業のしやすさにつながった。グループワークとメンバーの関係性は関連している。(学生 E)

- ・ 初めの方は緊張してあまり意見を言えなかったが、最後の方は自分の意見を言えるようになった。話しやすい環境ができてきたのだと思う。東明学林での合宿が会話も増えて距離を縮めることに寄与した。(学生 C)
- ・ 最初はメンバー同士で打ち解けていなかったが、最後の方はみんなが自分の考え方・やり方を提案しあうことができた。ディスカッションをする中で打ち解けていった。東明学林で仲を深められたのも打ち解けた理由の一つ。(学生 F)

これらのコメントから、友人関係が深まったことでお互いに言いたいことが言えるようになり、結果としてディスカッションが活発化した、プレゼンテーションがうまくいった、と学生が感じていることが分かる。グループワークの過程を通じて、学生たちは文化的背景の異なる他者を柔軟に受け止め、相手をリスペクトしつつ積極的に関わる「態度」を養い、さらに相手の意見に耳を傾けさらに自分の主張を伝えるといったコミュニケーションやグループワークの「スキル」を意識するようになった。学生のコメントから分かるように、これらの学びの深化は友人関係の深まりと同時に進行しており、友人関係の構築が学びの基盤として寄与したと考えられる。

さらに、学生の中には、特定の外国人学生との友人関係を通じて、今まで関心のなかった国にも興味をもつことができたとする学生がおり、これも友人関係が「態度」に関する学びに影響した事例といえる。その一例として、インドネシア人学生(Mさん)との友人関係を深めた学生のコメントを確認する。

- ・ 今までの考え方は「自分と外」と考えていたが、視野が広がった。最近学校が休みで授業がないのでニュースを見ることが多いが、いろんな方面のニュースが気になりだした。Mさんと接することによっていろいろな文化、価値観に対する興味が広がった。考え方・視点が一つではないと思うことが日常的にもプラスになっている。(学生 F)

このほか、関係が深まることで今まで知らなかった国に関して新たな「知識」を得た学生、さらに文化や国による違いに注目するだけでなく、そのような違いに影響されずに良好な人間関係を構築する上での新たな発見があったとする学生も見られた。

- ・ Pさんの国ではみんなで一緒にお風呂に入る文化がないため、初日は大浴場を嫌がっていたが、みんなで誘った。結果かなり気に入ってくれた。(学生 A)
- ・ 人とどうやってコミュニケーションをとったら人脈が広がるか／仲が深まるかが再確認できた。SSIPは世界中から来る留学生と一緒に何かを作り上げる過程が大きかった。アメリカだけでなく、日本人だけでなく、英語が母語でない他の留学生と交流が図れたことも大きい。英語が非母語の学生は日本人に近いと感じた。非ネイティブ同士だからこそ通じることも多かった。(学生 B)
- ・ 一番勉強になったこととして、深い会話をした時に相手の価値観などのパーソナルな部分分かることを学んだ。日常会話でしないような会話でないと価値観の違いなどは分からない。そういう深い話をするためには、その前からいい関係を築いておく必要があるし、そのためにも自分から話しかける

などきっかけを作らないと、結局相手の価値観まで辿り着けないことに気付いた。(学生D)

5. 考察と今後の課題

5-1 考察

以上のように、本プログラムを通じてどのような学びが得られたか、また参加者同士の友人関係が学びにどのように影響したか、という二つの観点から調査・分析を行ったが、その結果、以下のことが明らかになった。

5-1-1 本プログラムを通じて得られた学びの特徴

「態度」に関する学びについては、調査対象者全員から積極的な回答が得られた。具体的には、「自らが話しかけなければ始まらないことが分かった」(学生A)といった積極的に働きかけることの重要性や、外国人学生一人一人に柔軟に対応することの重要性が認識されており、またこの認識に基づき実際に行動したことで、「自信」や「成長」を感じることができたと語っている。さらに、多文化間メンバーによるグループワークについては、外国人学生の主張の強さへの対応と英語でのディスカッションの難しさといった2種類の困難が見られたが、このような困難を乗り越えてプレゼンテーションを成功させたことで、「終わった後の達成感は大かった」(学生D)、「困難ではあったが、挑戦することによって視野が広がった」(学生F)など、学生の自信につながったことが分かった。

ここで見られた「積極性」「柔軟性」「自信」「視野の広がり」はいずれも「態度」に関する学びの重要な要素であり、Deardorff (2006) が示すように異文化適応能力の基盤となる学びである。本調査でこのような「態度」に関する学びが積極的に示されたことは、異文化適応能力の獲得もしくは向上の観点から見て本プログラムに一定の成果があったものと考えられる。

次に「知識」における学びについては、自文化や異文化についての新たな発見が中心となったが、同時に文化の違いに着目するだけでなく、外国人学生との交流を通じてより一般的な人間の普遍性や共通性について実感している学生がいることも分かった。Deardorff (2006) では、「知識」に関して、個別文化に関する知識の学びと文化全般に関する知識の学びがあるとしているが、本調査においても両方の側面について知識が深まっていることが明らかになった。

前稿では、主に日本文化という個別文化に関する学びに着目して分析したため、外国人学生が自文化に関してどのような学びがあったのか、また文化全般に関してどのように理解を深めたのか、といった点については考察しなかった。外国人学生にも日本人学生と同様の学びがあったのかどうか、今後の調査において明らかにしていくことが必要である。

最後に「スキル」に関する学びについては、本調査では大きく二点あることが分かった。

一点目は英語によるコミュニケーション・スキルについてであるが、これは対象者全員が難しいと感じていた。多くの学生は、英語スキルがまだ足りないと感じながらも、言語以外の手段や、基本的な言葉を用いたシンプルな表現など、足りない部分を補うためのコミュニケーション・スキルを向上させ、結果的には「それほど大きな言葉の壁は感じなかった」(学生B)としている一方で、協働でプロジェクトを行う上では正確な英語力が必要と感じた学生もいる。これは単に英語スキル自体が低かったのではなく、自らの意見を主張したり相手の意見を評価したりする場面では、日常的な会話と比べて求められる英語スキルが異なることの発見があったからと解釈できる。このような多様な英語スキルの必要性も含め、外国人学生とのさまざまなレベルでのコミュニケーションを通じて、英語スキ

ルに関する多様な学びがあったといえる。

二点目は、多文化間グループでプロジェクトを進めるためのスキルである。プロジェクト型学習を進めるためには、情報収集力、分析力、タイムマネジメント力などの実践的スキルと並んで、リーダーシップ、チームワーク、傾聴・対話力といったコミュニケーションやチーム・ビルディングに関するスキルが必要とされる¹¹。本調査では、複数の学生から、グループの中での自分が果たすべき役割をこなすことができたという回答があり、多文化間グループにおけるチームワーク形成に関して一定のスキルの向上が見られた¹²。なおこれに関連して、本調査の対象でなかった一部の日本人学生の中にリーダーシップを発揮してグループワークを主導した学生がいたことも学生の回答から明らかとなった。一般に、言語面での優位性から外国人学生がリーダーシップを取る傾向が強いが、本プログラムにおいては必ずしも当てはまらないことが分かった。一方で、外国人学生の発想力や作業スピードの速さなど実務的スキルの違いに関する驚きや刺激についての言及もあり、日本人学生同士だけのプロジェクト型学習では得られない学びにつながったことが窺える。

前稿の調査では、日本人学生を含む非英語ネイティブの学生に対して、できるだけ分かりやすい表現や非言語的な方法で円滑にコミュニケーションができたといったスキルの向上が英語ネイティブの学生に見られた。また言語面以外でも日本人学生のコミュニケーションスタイルに戸惑いながらも、そのスタイルを受け入れる柔軟性が見られた。これらの結果と本調査における結果を併せて考えると、Cross-cultural Workshop を通じて日本人学生、外国人学生の双方に多文化間のグループワークを円滑に進める上での工夫が見られたことが分かる。一方で、本調査では、言語面でのスキルだけでなく、多文化間グループの中でのチーム形成のスキルに関して多くのコメントが見られたが、これは日本人学生にとって英語を使ったワークショップ型の学習が想像以上に困難だったこと、またその困難を乗り越えたことに対する充実感があったからと考えられる。この点は、外国人学生に関する調査では見られなかったことであり、Cross-cultural Workshop の日本人学生に関する学びの特徴といえる。

5-1-2 友人関係の深まりによる学びへの影響

本調査の結果、友人関係を構築する上で、日本人学生による積極的な関与があったことが分かった。これは前稿でも指摘されたことであり、外国人学生の感じた印象が日本人学生の自覚的なコメントによって裏付けられたといえる。またこの関係構築は3週間の間に段階的に進んだものであり、特に終盤の東明学林での宿泊研修によって関係が深まったことも前稿での調査結果と一致している。前稿ではその理由として、インフォーマルな交流による相手の人柄やストーリーを知ることの重要性が指摘されており、本調査においても複数の学生がプライベートな時間の共有によって関係が深まったと語っている。さらに本調査では、友人関係の深化の程度についても複数の学生から回答があり、それによれば普段キャンパスで行われる外国人との交流に比べても、かなりの程度まで親しい友人となったとしている。本調査での対象学生が全員海外留学の経験があることを踏まえると、この傾向は注目すべきと考ええる。

この点に関連して、横田（1991）は留学生と日本人学生の親密化に関する研究の中で、異文化間での友人関係の構築において、日本人の場合は初期の緊張感が高いことが大きな障壁になっており、その緊張感を緩和する上で集団活動への参加が有効なアプローチとなっていることを指摘している¹³。本プログラムでは、学外での活動（グループ調査とその後の食事）や東明学林での寝食を共にする宿泊研修というインフォーマルな集団活動によって緊張感が低減された。またその過程で日本人学生がホ

ストとして積極的に関わっていたことが分かった。これらの要素は、横田（1991）が指摘した「障壁」を乗り越え、異文化間での友人関係を構築する上で大きな影響があったと考えられる。このことは、本調査において、最初はお互いに緊張していたが、グループでの広告調査や最後の東明学林がきっかけとなって打ち解けた、といった学生の証言によって裏付けられている。

このように、緊張感が低減され親しい友人関係が構築されたことで、日本人学生にとってはより効果的な学びが得られたと考えられる。その成果は、グループの結束と、その結果によるディスカッションの活発化、およびプレゼンテーションの成功という達成感に現れている。すでに述べたように、学生たちは本プログラムを通じて「積極性」「柔軟性」「自信」「視野の広がり」といった、「態度」に関する学びを深めることができた。これらは外国人学生とのグループワークを通じて得られた学びであり、そのグループワークは友人関係の深まりに支えられていた。言葉を変えると、インフォーマルな形での集団活動によって友人関係が深まり、そのことがプログラム本来の目的であるグループワークでの学びにつながっているといえる。

次に、「知識」に関する学びにおいては、自文化および異文化についての知識を深めるとともに、より一般的な人間の普遍性や文化の共通性について学びを深める学生が見られた。本プログラムにはさまざまな国からの外国人学生が参加しており、日本人学生はそのような外国人学生との関係を深めることで自然にそれぞれの国による文化的違いや、多くの文化に共通する普遍性を学んだ。このような関係性の深まりについて、学生Dは「相手のことを深く理解するためには、その前の段階でお互いに関係性が深まっていないと深い会話ができない」とコメントしている。この洞察と、実際にそのような関係に基づいて得られた学びの背景には、友人関係の構築が土台にあったと考えられる。

最後に、「スキル」に関する学びにおいては、英語によるコミュニケーション力、チームワーク力に関する学びがあったことが分かったが、このうち特にチームワーク力の向上において友人関係が強く影響していることが明らかになった。学生のコメントの多くは、東明学林でのプレゼンテーションの準備、リハーサルとその後の修正を通じてディスカッションが活発となったことを示している。また、東明学林では多くの時間をグループで過ごし、プライベートな時間を共有することができたとしている。学生Eはメンバーの仲が深まっていったことがプレゼンテーションの作業のしやすさにつながったとして、「グループワークとメンバーの関係性は関連している」と語っており、活発なグループワークを行う上でメンバー同士の友人関係の深まりが影響していることが窺える。

異文化間交流における友人関係の重要性はこれまでも指摘されている¹⁴。本稿では、以上のように、その重要性について、異文化適応能力に関する学びへの影響という観点から具体的に示すことができたといえる。

5-2 今後の課題

最後に、今後の研究課題として、以下の三点について触れておく。

一点目は、前稿でも指摘した課題であるが、さらなる事例の調査である。本調査は前稿の調査と連続して行われたもので、その調査方法は少数サンプルによる質的調査という点で大きな違いはない。今後、異文化適応能力の獲得に関する一般的な知見を得るためには、他のプログラムとの比較や大規模な定量的研究を行う必要がある。

二点目として、友人関係の構築が異文化適応能力の獲得に影響しているという本調査での考察を踏まえ、プログラムの中で友人関係を構築するための仕掛けをどのように用意するかという、実践的な

手法の検討が必要である。本調査では、対象となった日本人学生はいずれも友人関係の構築に成功しており、実際に大きな学びを実感している。前稿では、外国人学生の中で友人関係の構築に成功した学生とそうでない学生がおり、学びの程度にも個人差が見られた。プログラムにおける学びの質を高めるためにも、友人関係の構築に影響を与える要因についての探索的研究を進めるとともに、実践的な手法を確立することは有効であると考ええる。

三点目として、多文化間共修プログラムにおける理論的枠組と友人関係の構築との関連性についての研究である。大学のプログラムにおける多文化間共修に関する事例研究では、多文化間の相互理解を促すための社会接触仮説（オルポート 1961）や、異文化感受性発達モデル（Bennett 2004）といった理論をもとに、シラバスや授業計画に示された教育目的やアウトカムの達成に着目した分析が多く見られる。友人関係は、フォーマルな教育プログラムから外れたインフォーマルな交流によって育まれる可能性が高いことから、多文化間共修を考える上で、インフォーマルな交流も視野に入れたより広い観点での分析が求められる。

本プログラムは今後も継続される予定である。引き続きプログラムの実践を通じて、参加学生の異文化適応能力の獲得と親密化の関係について理解を深めていきたい。

注

1 本稿における「外国人学生」「日本人学生」とは、特に国籍による違いを意味するものではなく、「外国人学生」は本プログラムに参加する海外の協定大学等の学生を、「日本人学生」は昭和女子大学の正規課程に在籍する学生（ただし留学生を除く）を意味するものとする。

2 西川，山崎（2018）

3 坂本，堀江，米沢（2017）p. iii

4 本調査では、ジャーナルに基づいた分析は行っていない。

5 神奈川県足柄郡大井町にある本学の学外研修施設の一つであり、宿泊施設が整っている。

6 本調査で用いた半構造化インタビューの主だった質問項目は以下の通り。

「なぜ SSIP に参加しようと思ったのか？」

「SSIP ではどんな期待や目的をもっていったか？」

「その目的・期待は達成できたか？ 目的達成のためにどういうことをしたか？」

「SSIP でよかったこと、大変だったことは何か？」

「SSIP を通じて仲良くなった人はいるか？」

「何がきっかけで仲良くなったか？」

「東明学林ではグループのメンバーとどんな風に過ごしたか？」

「自分は友人をつくるのが得意な方だと思うか？」

「SSIP のグループワークはうまくできたと思うか？」

「プレゼンテーションを仕上げるのは簡単だったか、大変だったか？」

「グループワークを進める上で、どういう点がうまくできたか（できなかったか）、うまく進めるために自分は何をしたか（しなかったか）？」

「外国人学生とのコミュニケーションにおいて、ことばの壁はどのくらい大きかったか？」

「外国人学生と日本人のメンバーでは、接し方の違いや親しさの度合いに違いはあったか？」

「メンバーとの関係は、最初と最後では何か変化はあったか？」

「SSIP で学んだことの中で、自分にとって重要だと思うことはあるか？」

「SSIP に参加して、自分の中でどんな変化があったか？」

「これまでの留学経験と比較して、SSIP のよさはどんなところにあると思うか？」

「SSIP (CCW) に対する満足度はどのくらいか？」

「友人関係の深まりは、プログラムの満足度に影響すると思うか？」

7 TUJ との単位互換プログラムでは、外国人学生を含む正規学生が多く学ぶ正規授業履修プログラムと、同大学への進学を目指す日本人学生が中心の進学準備課程であるブリッジプログラムの2つがある。単位互換プログラムに参加した調査対象者2名のうち、1名は正規授業履修プログラム、もう1名はブリッジプログラムであった。

8 佐藤 (2008) p.62。

9 コード化によってカテゴリー分類した結果は以下の通り。

「プログラムで学んだこと」

「プログラムで実践できたこと・実践できなかったこと」

「グループワークに対する困難とその克服」

「自分の英語力に対する不安と自信」

「外国人学生の態度に対する驚き」

「グループの結束」

「友人関係の学びへの影響」

「友人関係に関する自分のパーソナリティ」

「友人関係および親密になるきっかけ・体験」

「内省と自分の中の変化」

「友人関係によるプログラムの評価への影響」

「プログラムの評価」

10 特に米国や欧州の大学では、高等教育における国際化は“Internationalization Abroad”と“Internationalization at Home”の二つの側面があるとし、キャンパスでの国際交流プログラムの開発を後者の重要な活動としている。例えば Wächter (2000), 堀江 (2017) を参照。

11 坂本 (2013) は、異文化間グループによる協働学習での学びとして、タイムマネジメントやチームワークスキルなどの実践力の重要性を指摘している。

12 西岡, 八島 (2018) では、チームワークに関連するスキルとして、「共感」「傾聴」に対する日本人学生の意識の高さを指摘している。また、加賀美 (2006) では、日本人学生は外国人学生と比較して、多様性尊重、状況判断、傾聴性、柔軟性など、自己主張を抑えた他者依存的な、相手の状況に応じた関わり方を重視する傾向が見られるとしている。

13 横田 (1991) p.93。

14 宮本 (2013), 坂本 (2013) など。

参考文献

秋庭裕子 (2012) 「「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外短期研修の学習成果：オーストラリア研修の事例より」『一橋大学国際教育センター紀要』(3), 一橋大学国際教育センター, pp.15-28

オルポート, ゴードン W. (著), 原谷達夫, 野村昭 (訳) (1961) 『偏見の心理』培風館

加賀美常美代 (2006) 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか—シミュレーション・ゲームと協働

- 的活動の場合—」『異文化間教育』(24), 異文化間教育学会, pp.76-91
- 坂本利子 (2013)「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか—多文化共生力育成をめざして—」『立命館言語文化研究』24 (3), 立命館大学, pp.143-157
- 坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子 (編) (2017)「はじめに」坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子 (編)『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する—』, 学文社, pp.i-iv
- 佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法: 原理・方法・実践』, 新曜社
- 西岡麻衣子, 八島智子 (2018)「異文化間能力の変容から見る異文化間協働学習の教育的効果—接触仮説とその発展理論の可能性—」『異文化間教育』(47), 異文化間教育学会, pp.100-115
- 西川寿美, 山崎真伸 (2018)「外国人学生と日本人学生による短期協働プログラムにおける学びと友人関係の構築に関する事例報告—SSIP2018に参加した外国人学生に関する調査—」『学苑』(936), 昭和女子大学, pp.64-79
- 堀江未来 (2017)「多文化間共修とは: 背景・理念・理論的枠組みの考察」坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子 (編)『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する—』, 学文社, pp.1-33
- 宮本美能 (2013)「留学生と日本人学生の親密化阻害要因を排除する方策—多文化クラスにおける参与観察に基づいて—」『留学生教育』(18), 留学生教育学会, pp.15-24
- 横田雅弘 (1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』(5), 異文化間教育学会, pp.81-97
- Bennett, M. (2004) Becoming interculturally competent, In J. Wurzel (Ed.), *Toward multiculturalism: A reader in multicultural education* (2nd ed.,). Newton, MA: Intercultural Resource, pp.62-77.
- Deardorff, D. (2006) Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization, *Journal of Studies in International Education*. 10 (3) pp.241-266.
- Wächter, B. (2000) Internationalisation at home - the context, In Crowther P., Joris M., Otten M, Nilsson B., Teekens H. and Wächter B. *Internationalisation at Home, A Position Paper*, European Association for International Education (EAIE), pp.5-13.

【訂正】

前稿(西川寿美, 山崎真伸 (2018)「外国人学生と日本人学生による短期協働プログラムにおける学びと友人関係の構築に関する事例報告—SSIP2018に参加した外国人学生に関する調査—」『学苑』(936), 昭和女子大学, pp.64-79)における本文中および参考文献中の「Deardoff, D. (2006)」を, 「Deardorff, D. (2006)」と訂正します。

(にしかわ すみ 日本語日本文学科)
 (おんむら ゆかこ 日本語日本文学科)
 (やまざき まさのぶ 国際交流課)